情報メディア 34−1
（1998. 11. 26）

メディア社会の文体とことば

岡林みどり
ポーラ文化研究所（E-mail　VFE06210@nifty.ne.jp）

はじめに

1995年の情報メディア研究会シンポジウムで「マーケティングと身体」を発表した。その中で、4つの身体をイメージし、その関連に注意を向けるべき事を提案した。4つとは物質場にさらされる「生身の身体」、情報場にさらされる「メディアとしての身体」、危機ないしは仮想された危機（＝課題）に反応する「行動する身体」、その3つの身体に依存しながら動物とは異なる人間を特徴ずける「創造する身体」であった。

その時に気になったのは「創造する身体」が「遊びと倦怠、あるいは労働と休息」のような動物ならば失う事のない「リズム」を失っていることであった。この3年間このことについて考えてきたことをまとめてみたい。

当時はこの研究会の設立趣意書にもあるように「膨大な一次情報の氾濫の中でもっと多くの情報を摂取しなくてはならないという脅迫観念が常に我々を責めつけている」からではないかと考え、そこからの脱却を考えればいいのではないかと考えていた。

だが、それではアメリカも同じくこのような危機が顕在化しなければならない。しかし一方は大統領のスキャンダルさえもインターネットで公開し、さまざまな階層が議論をし、日本やヨーロッパの良識が考える「罷免には値しない」という良識を現実化することに成功しそうである。だがこの国では情報投資に向けた公的資金の注入は喧伝されるが、人々の意識や生活の仕方にどのような変化をめざしているのかが明らかにならない。

何故か。

それは「脅迫観念」があまりに多くばらまかれているからである。よく考えてみればなぜ我々はもっと多くの情報を摂取しなくてはならないと考えてきたのだろうか。問題は情報が氾濫していることにあるのではなく、我々が外界に対して脅迫観念をもつようにマインドをコントロールされている事にあるのではないか。とすれば対策は氾濫する情報の中にではなく、我々のマインドの中に見つかるはずである。

1）従来メディアとインターネット

我々は何時のころからか、メディアから流れてくる情報は間違いのない、権威ある情報であり、多くが価値があるものと思い込んでいる。それが「情報」に対する一種の信仰にもなり、未来の夢の情報メディアの一つとされるインターネットに淫らな図像情報や嘘の文字情報が流されていたということが大新聞の記事になるのである。

しかし日本では満員電車の中で淫らな画像を眺めても規制はされないし、アメリカでも友達に嘘を話したぐらいでは新聞記事にはならない。インターネットとはそういうものであるし、だからこそ従来メディアとは違うのである。

つまり「情報や知識はそもそもマインドの中にあるものが大切であり、それを直接共有する事で人間関係を真に協力的なものにできる」という前提こそがインターネットを普及する社会には求められる。

マインドの中にあるもの（REAL）が反社

WHATS WRONG WITH OUR LITERARY STYLE ?

MIDORI OKABAYASI
RESEARCH INSTITUTE OF BEAUTY AND CULTURE OF POLA COSMETICS

会的であろうと良識的であろうと、それは身体の外にある淫らな写真や聖書の文章と同じく現実（REAL）であると考えなければ、それらを可能な限り全てを外在化させていこうとするインターネットに巨額の投資をする意味はないのである。

アメリカでは、それはヴィクトリア朝以来の「身体の隠蔽の上に作られる上品さや良識による権威」ではなく、「公開された誠実さと実績による権威」を確立するという国家目標をささえる重要な現実認識(REALITY）である。

しかし日本の従来メディアの政治・経済・情報分野におけるスター検察官の報告書に関する男性識者のコメントは多くが否定的な見解である。彼らはその核心部分を閲覧にいった34万人（アメリカの人口あたり1～2%）ともいわれる人々が好奇心から行ったという前提でしか分析しない。

だが、スター報告が公開される直前のニューヨーク・タイムスは大論文で「民主主義に対する危機であるから皆で徹底的に議論するべきだ」という主張をしている。報告書が公開された後の社説が共和党よりであったとしても、それはワクチンを注射してから病原菌を投与したようなものである。白血球が傷口に集るように、政治的関心が高い層がインターネットの閲覧に押しかけたのである。

その結果、学位をもつ友人からきたメールでは「クリントンがイケナイ、イケナイと思いながら止められないという感じがよく伝わってきた。後悔しているのだから許しましょう」となっていたのである。そういうメールが全米をとびかったはずである。10月28日現在、共和党はインターネットなどとは無縁の貧しい低学歴主婦にしか中間選挙の活路を見いだせない、と新聞は報じている。

民主党は今までの情報化投資を回収する段階に入るはずである。最大の果実は、日本で注目されているようなアントレプレナーやＳＯＨＯといった単なる新しいビジネスのスタイルの誕生などといったものではなく、新しい信認のシステム（即時・透明・直接）の確立である。

ゴア副大統領は連邦政府の文書を低学歴層が十分に理解できる基本英語に書き換えると宣言しているし、2002年には初等中等教育の新しいプログラムを立ち上げる事が決まっている。それは全ての国家や帝国の衰退が、経済的な困難にともなう信認の崩壊によっているという歴史的事実に正面から挑戦する国家事業である。そのための重要なツールとしてインターネットが構想され、それの国家規模の実験がすでに始まっている。

日本ではドル崩落は何時か、日本こそ債権国だ、などという議論が飛び交っているが、インターネットこそはアメリカ政府（あるいはドル）の信認を持ち堪える手段であると同時に万が一にも政府の信認が崩壊した時にはアメリカ人、一人一人が生き延びるための保険となるのである。

情報関連産業に従事する人達はこのような全体像を日本の世論にきちんと伝える役割をはたすべきである。

3）従来メディアの文体

一つの特徴は、我々の教育が知識の注入を目指してきた事からもたらされている。だから優秀な人物とは沢山の知識の断片を知っている、すなわち「識者」であった。だからメディア（学校やマスメディア）を通して流れてくる知識は知っておかなければならないもの。知らなければ「勉強不足」と烙印を押されるという考え方が長い間の性となってしまっている。それゆえ文体は「説明調」である。

さらに商業的な文章では他に引用される事が価値をもつので「正確さ」「客観性」が重視される。ついで「羅列的」になる。10の知識を並べた文章と、15の知識を並べた文章のどちらがかありがたがられるか。情報を質で評価するのではなく量で評価するので10よりも15の方がありがたがられる。それは銀行が、

人間の可能性にではなく、既に持っている資産で人を評価する文化ではやむをえない。それを再生産しているのが知識の量を評価する大学受験システムである。

そしてそれが第二の特徴につながるのであるが、羅列は「網羅的」となる。情報化とは本来はデータの取捨選択が勝負である。つまり情報化とはきわめて恣意的な、それゆえに創造的な活動である。しかし先の理由で「客観的」であることが信仰されているので、その矛盾を隠蔽するためには「全部」並べる事が必要になる。それで「網羅的」となる。それゆえ日本の情報産業では創造力よりも体力が勝負になる。

その結果として膨大に生産される商業文章は意図不明である。メッセージ性が弱い。しかし事ここにいたると、文章生産の意味そのものが消失する。したがって多くの場合「識者」はなんらかの手をうってくる。そうでない場合は次のお座敷がかからなくなるはずである。つまり市場から淘汰される。

それが第三の特徴を生みだす。一言でいえば「大変だ」というメッセージの氾濫である。「大変だ、という問題や課題」を所与として文章が生産される。

いわく、

「インターネットにのり遅れるな」

「西洋に比べて日本は駄目だ」

「中国にも遅れをとった」

ここでは

「別にインターネットがなくても今までも十分幸福だったじゃない」

「西洋と日本は違うのだから比べる事はできないはずだ」

「中国は歴史がある国だから、いつか復活するのは当然よ。素晴らしい！！」

などという反応は許されない。

つまり「課題が発見される」のではなく、識者によって「課題が与えられる」のである。それゆえ人々は現在では「課題を解決するため」にではなく「課題を教えてもらうため」にメディアを利用するようになっている。

その結果人々のマインドの中には「危機」があふれかえるのである。マインドが危機にさらされ続けているということは、いつも身に危険が迫っているわけだから、当然創造力などは発揮できずに、目の前の課題解決に精も根も使い果たす事になるのである。一方で識者の文体にもどんどん「解決策の提案」を見いだす事が少なくなっていく。課題を与えるだけで商売になるならば、なんで苦労して解決策を考えるだろうか。

だが、情報価値とは課題解決にある。

道路に穴を発見したことに対価が払われるのではなく、穴を塞ぐ事に対して対価は支払われるのである。情報化時代には直接穴を塞ぐ仕事にではなく、穴の塞ぎ方の提案に対しても対価が払われるようになるかもしれない。だが穴の発見に対して対価が払われるべきではない。そんなことを続ければダイヤモンドの代りに穴を探索する職業が急成長して、社会には価値の逆転が生じ、モラルハザードを起こしてしまう。そして世間は鬼ばかりならぬ、穴だらけになってしまうのである。

以上で従来メディアの文体に関する私の「課題提起、発見」は終わりである。では次にこの課題の解決策の提案に入る。

4）文体と信念

我々はさまざまに言葉を紡ぎ文章を書くが、内容は変わっても文体は変わりにくい。人は固有の文体を持つ。だが日本文化とはその固有性を謙譲語や尊敬語などを多用する事で鋳型にはめ込み、個人の文体を隠蔽するシステムである。それにより人々の社会的階層関係を特異的に顕在化し、流通させていくシステムである。

だが人間は固有の文体を持った時に、自我が顕在し個性が発揮できるのである。それは誕生の瞬間から獲得される続ける世界の断片は人によって違っていて、一人として同じではないからである。成長とはそれらの断片を、

自己の脳内の認知のメカニズムを駆使して一つのイメージへと統合していく過程である。その過程で外界情報、宗教や政治信条などの規範が与えられ獲得されたとしても、それらが全体として脳内で一つに統合され、枠組みとして定着しない限り、それは人の信念とはならない。

信念がなければ「百万人といえども我一人行かん」という行動はできない。したがって教育の一方の目的はこのような信念を人々の中に育て上げる事でなければならない。信念をもった人物が育たなければ、皆が横並び、あるいは上位等級者の言いなりになるだけとなる。そのような社会は危機にあっても速断ができないで皆一緒に死んでしまうか、あるいは上位等級者がまちがった判断をした時には全員が致命傷を負ってしまう。

したがって社会あるいは共同体の持続を計るためには、信念をもった大人を多く育てなければならないのである。それが西洋社会での多様性重視の意味である。けっして生まれついての気質的な、あるいは身体的な差異を野放しにして、礼賛することではない。

教育問題というと我々は何故か学校を思いだす。最近は家庭の責任がいわれるが、もう一つ忘れていけないのが社会、あるいは世間である。とりわけ中流家庭の子どもにとっては家庭や学校では隠蔽によって保護されていた悪や頽廃にふれる場であり、そこで精神の免疫抗体にも相当する信念が育つのである。反対に家庭に恵まれなかった子どもにとっては世間や学校でワクチンを投与され、改めて悪や頽廃への抵抗力が強化されなければならないのである。

従来の社会では世間という現実あるいは本音の世界が確としてあって、一方で学校で「べき論」あるいは「正解」を教わってきた。だがメディア社会とは世間そのものが、いや家庭すらがメディアによって見えなくなっている社会である。それにも関わらず日本の従来社会で流通していた、前節で見たような「識者」による説明的、客観的、羅列的、網羅的「正解」が氾濫していると、とても「信念」などは育ちようがないのである。

学校ですら「教える学校」から「学ぶ学校」に変わるのであるから、メディアも変わらなくてはならない。その転換の要点は「文体の革新」にあるはずである。正確で豊富な情報は大切であるが、それをどのような文体に載せるのかの工夫が必要である。

それぞれが異なる世界の断片を持っている一人一人が、それぞれに自身のもつ断片を統合して、世界の枠組みとして明晰に認識することを助ける文体を工夫しなくてはならないのである。

5）信念と信認

前節で教育の目的の一つが信念の育成だと述べた。しかしそれは主として家庭と社会によって担われてきたものである。だから近代以前、学校がない時代にも信念によって行動する人々は沢山いた。いやむしろ学校こそが人々から信念を取上げたという人もいる。それは学校が識字率の向上を目的としていたからである。なぜならば人々の信念は統治にとっていい事ばかりではなかったからである。信念は人のマインドの中にはたしかに在る(real)のであるが統治者には見えにくいものであった。そして統治者の信念を伝達するにも文字が必要であった。さらに人々自身にとっても、それぞれの信念を交換するには文字を知っていた方が便利だと思われた。それで近代社会では識字率の向上は無前提に「善」とされてきた。だが、日本で識字率100%を達成したのははるか昔の事である。

それにも関わらず日本社会と文部省の教育目標は識字率の向上のままであった。だから従来メディアは意識されないままに結果として統治者の信念の伝達の場のみに矮少化してしまった。

われわれは識字率100%を達成してしまった社会における教育の目的を再検討すべき時

にいるのである。識字率の向上は統治者と被統治者、統治者同志、そして被統治者同志のあいだの信念なる世界の枠組みの交換を促進する事が目的であったはずである。なぜならばその時にのみ、人と人は信認で結ばれ、その信認を共有する集団こそが共同体となりえるからである。文字を媒介にした信認のシステムはより大きな、より多層な共同体を現実化する。それにより余剰は拡大し、人々は豊になるのである。

信認はけっして対等の人々の間にのみ成立するわけではない。統治者の武力が圧倒的に優位にあって逆らう事ができないと被統治者が確信すれば両者の間には信認が成立している（奴隷性社会）。統治者が優れたモラルに支えられ、最善の政治選択がなされるだろうという信頼も信認の一つである（古代の神権国家）。多くの社会はその中間にある。

そして大多数が識字者である民主主義社会とは統治者の選択と政策の提案を通して統治者と被統治者が信認を交換するシステムである。そこでは読み書きの技術の目的は、より高度な２つの技術をささえる事を目的としなければならない。一つは各人の内部にある各人を支えている世界の枠組みを情報化し、他者に公開する技術である。これを自己開示力というが、これにより各人がそれぞれの内部の信念に基づいて、どうような行動にでるかを社会的に予見可能にする。２つ目は各人の内部世界の交換を通してより大きな世界の枠組みへと各人を統合する技術である。これが政策提案力である。

アメリカの政治が世論調査を気にするのは世論調査を通して次の政策に対する有権者の反応／投票行動を予見する技術が統治者にあるからであり、それが現実化する事で結果として被統治者は統治者と信認を交換しているのである。そのフィードバックが成立するということは、統治者に優れた統治技術があるということだけでなく、有権者が自己の価値観や世界像を可視化している、つまり開示しているからこそ可能なのである。

つまり現在日本では政府や行政の情報公開の不十分が取上げられるが、アメリカでは被統治者の自己開示も同時に進んでいるのである。それは信認のシステムを相補的、あるいは相互的に作りかえる事である。これが奴隷性社会や神権国家と異なる点である。古い社会では信認は下から上への一方通行である。統治者はある日突然、革命や暴動や外国の侵略によって信認が空洞化していることに気づくのである。つまり社会の破綻という被統治者にとっても統治者にとっても最悪の選択しか残されていない状況の出現によって。

6）新しい文体を考える

世界第二位のＧＤＰを生産する世界最大の債権国が、気がついたら統治者への信認が空洞化し破綻を迎えるなどはありえない、と思うのは歴史を知らない愚か者だけである。われわれはけっして空洞化しない信認のシステムを、崩れ落ちるそばから形成していく活力があって穏健な社会を作り上げなくてはならない。それこそが未来の子どもたちに負うべきわれわれの最大の責務である。それは同時に穀物を生産し輸出してくれる人々、あるいはわれわれの生産する工業製品を輸入してくれる世界中の友人に我々が応えるべき最少限の誠意である。

そのためにはメディアの文体を、統治者と被統治者の間の信認の交換を促進するうえで有効な文体かどうかを厳しくチェックし、現在の「識者」による説明的、客観的、羅列的、網羅的「正解」の氾濫を防がなくてはならない。なぜならばこのような文体は人々を分断し、人々に自己開示が自分にとって益のないものとみなさせるからである。

最近でこそ「ノイローゼ」の人に「がんばれ」というのは病状を悪化させるということが知られるようになったが、日本では人に向かって「がんばれ」といってはいけない場合が多々あることは常識になってはいない。だ

が信頼関係のない人に「がんばれ」といわれると普通は「この人は私の努力が足りないと考えている」という情報をなにがしかは受け取るのである。そう思ったとたん人は相手に自分をひらいていくことはない。つまり信認の交換は成立しない。

つまり言葉は多義的である。このことを情報化社会では第一義に考えて設計しなければならない。「がんばれ」という言葉は「正解」である。誰もが否定はできない。だが時と場合によっては「相手を罵倒する」意味にもなるのである。つまりメディア社会では「正解」はないのである。

あるいは東大卒の人が初対面で学歴を問えば、運よく東大卒であれば、何事も起きないがそうでなければ相手は心象を悪くする。そして東大、あるいは東大と同程度の偏差値の大学を卒業する人は毎年1%位なのだから、心象を悪くする確率は99%なのである。しかし逆に東大を悪しざまにいっても家族も入れても10%位の人しか心象を悪くしない。だからといって東大や大蔵省の悪口を氾濫させても、人々の信認の交換は活発にはならない。

メディア社会では正解のおしつけによって相手の心の中に自虐的な心情をひきおこす表現と、関わりの薄い他者を誹謗する言説の２つは流通させてはならない。それらは内容がどのように素晴らしくても、受け手の心の中に自尊心を育まないからである。それは実は送り手の思想も育てない。

言論の自由とは、あらゆる事実を告知する自由であって、事実をのせる文体それ自体はメディア参加者の相互批判によって上記２つの文体は徹底的に淘汰していかなければならない。そうしなければ人々が互いを思いやり、他者の幸せに貢献したいという気持を育む事ができない。相手の意見に耳を傾け、互いにとって最善の解決策が見いだせるはずだという相手に対する尊敬を高めることができない。洗練された文体とは、この尊敬とおもいやりを育む文体であって、立派な人の立派な言説（正解）をたくさん引用した「識者」の文体ではないのである。

洗練された文体はそれが被統治者によるものであっても、それは「指導者・リーダー」の文体である。

7）まとめ

以上の議論で提起した新しい文体を「一期一会の文体」と名付け、従来の文体を「識者の文体」とし、下にその全体概念を図示する。

私たちはコンピューターに向かってキーを叩くとしても、その先に人間を想定するから言葉を紡ぎだすのである。その時には相手を尊敬し、相手によかれと思う、つまり思いやりがあるから言葉を発するのである。その２つが欠けた言葉は「情報」などという生易しいものではなく、実は「呪い」となって自分に帰ってくるのである。信認のシステムを持続させるには、より多くの人々が尊敬と思いやりによって言葉を発することだけしかないのである。それが識字率100%を達成した社会では教育の生涯を通した最終目標である。

参考文献；論座(１１月号、朝日新聞　1998)
§ 情報化時代のソフトパワーを検証する　J.S.ナイ他
§ 新しいメディアの「文体」　大江健三郎

	一期一会の文体	識者の文体	MESSAGE
WHO	責任と自発性	権威／他者の評価	I
WHEN	今の身体感覚	本歌とり	NOW
WHY	おもいやり	説教	for KINDNESS
WHERE	ここにある事実	上下関係	HERE
WHAT	尊敬	課題	by RESPECT
HOW	提案	よきにはからえ	PROPOSAL